

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第五號

第三十五卷

昭和七年十一月一日發行

論叢

多收手段としての酒税……………法學博士 神戸 正雄
笠間藩の民政……………經濟學博士 本庄 榮治郎
安定期經濟學と變革期經濟學……………經濟學博士 石川 興二
ロングフィールドの價值論と分配論……………經濟學博士 堀 經夫

研究

我國の市町村義務費に就いて……………經濟學士 小山田 小七
金爲替準備への再吟味……………經濟學士 松岡 孝兒
證券資本主義^{時代に於ける}資本の構造……………經濟學士 石田 興平
カルテル法への要望……………經濟學士 磯部 喜一

說苑

貨幣の價值に就いて……………文學博士 高田 保馬
人口動態並行法則を論ず……………經濟學士 三谷 道麿
爲替相場の變動に就て……………法學士 正井 敬次

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

（禁 轉 載）

説苑

貨幣の價值に就いて

——柴田助教授に答ふ——

高田 保馬

私は論文『貨幣の價值の受動性』に於て、貨幣の價值は受動的に定まる、それ自體の本來の價值と云ふものをもたぬと云ふ主張（これは通用の平凡なる見方であるが）を述べた。これに對して、助教授柴田學士は、『貨幣の主觀價值について』と云ふ論文に於て、私見に對する疑問を述べられてゐる。此疑問に答へて、精密なる批評に拘はらず、私は依然として私見をすて得ざること、極めて簡單に述べようと思ふ。

まづ柴田學士の本論の部分から吟味しよう。柴田學士の批評の對象となつてゐる私見は、かう云ふのである。バレットの一般均衡の方程式組織に於て、貨幣をそ

貨幣の價值に就いて

れ自體の價值なきものとする時には(c)の最初の方程式が脱落する³⁾。けれどもそれは交換方程式によつて補はれることが出来るから、均衡の成立は可能である。私はかう云ふ立場に立つて、デイヴィジアが同一の目的に用ひたる交換方程式をも引用した。柴田學士はこれに對して次のやうに述べてゐられる。『高田教授はこれ（デイヴィジアの交換方程式——高田附記）を説明して、これが實質に於ては普通 $P = \frac{MV}{Q}$ の形を以て示さるゝ交換方程式であることは云ふまでもない、と言つてゐる。然しながら、上記方程式組織(c)を一見してもわかる様に、 $P_1Y_{10} + P_2Y_{20} + \dots = 0$ である。従つて上述の方程式は交換方程式とは全然異なるもので、 $2Q = 0$ と言ふ背理を示すものに過ぎない¹⁾。しかし、私は答へて云ふ。デイヴィジアの交換方程式 $2Q = P_1Y_{10} + P_2Y_{20} + \dots + P_nY_{n0} = 0$ はかゝる無意味のものであらうか。柴田學士はこの「 P_1Y_{10} 」に於ける絶對値を示す符號を見落されたい。 $2Q = 0$ であると云ふ批評の仕方はい見落しの單純なる結果である。従つてデイヴィ

第三十五卷 七一九 第五號 一二三

1) 第五號第一頁以下
2) 第三十四卷第五號第一頁
3) 經濟論叢、第三十五卷
4) 經濟論叢、第三十八卷

イジアの交換方程式を交換方程式となるやうに書き改めようとする學士の試みも無用のことである。かゝる見落しがないやうに、私は、 $|Y_1 - Y_{10}|, |Z_1 - Z_{10}|, \dots$ など、各主體の賣り又は買取る財の數量に價格を乗じたるものゝ總和」と述べて置いたのであるが。

柴田學士によれば、これを正しき交換方程式と書き改めると『それによつて、問題解決への一步が踏まれるであらう。然し、果して其意味ならば、貨幣の流通速度はどうしてきまるか。高田教授は『一定の生産組織、交通組織、販賣組織が與へられてゐる以上、貨幣の流通速度は貨幣要求權説の本質を貫き通す限り、所與であり、一定のものであると言つて居られる。然し、貨幣要求權説の本質は所得は全部支出すると言ふ假定を入れる事によつて十二分に充されてゐるのではなからうか。貨幣の流通速度が何程であらねばならぬか、と言ふ事に就て貨幣の本質觀が何等かの必然的關聯を有するであらうか。』⁵⁾學士は貨幣要求權説の本質だけからは貨幣流通速度の一定と云ふことが出て來ないと言

はれるのであらう。それは正しい。だから私も、貨幣流通速度の一定を貨幣の本質觀だけから導き出す考はもつてゐない。生産組織の一定と要求權としての貨幣があれば、其流通速度は一定してゐるはずであると云ふに止まる。學士は更に進んで述べられてゐる。『此點（貨幣の流通速度一定と貨幣要求權説との必然的關聯——高田附記）こそは更に明にせらるべき問題ではなからうか。高田教授は此の必然性を證明すべき一の企てをして居られる様である。』⁶⁾此企圖の内容は、主體が交換後所有する貨幣量の全部が賣買せられたる財の價格總額に等しきことを示す方程式をかの交換方程式の代りに置くことにある。⁷⁾これに對して柴田學士の批判は次の如く進行してゐる。『教授によれば、 $x_1 = p_y y_{10} + p_z z_{10} + \dots$ とされてゐる。所で $x_1, x_2, \dots$ は交換の後各主體の保持する貨幣量である。従つて此方程式は、交換後保有さるゝ貨幣量は交換前所有せし商品量の總價格に等しいと言ふ事を意味するのである。それは交換前所有せし商品量が全部賣却されると言ふ假定の下に於

5) 同上、頁八二
6) 同上、頁八九
7) 『貨幣の價值の受動性』三一頁以下

ては商品販賣によつて得られる貨幣は商品購入に向けられる事なく、全部保藏される事を意味する。斯かる事が、貨幣の本質上必然的に要求せられるとは考へ難い。』私は思ふに、これが柴田學士の批判又は疑問の唯一の點であるが、しかしそこには學士自身の斷言があるのみにて、何故にかゝる斷言がなされるかの論據を見出すことがない。商品販賣によつて得られたる貨幣は、商品購入に向けられる事なく全部保藏せられることが貨幣の本質上必然的に要求せられずと云はるるが、私の論文に於ては既に一定の生産組織、従つて交通組織、販賣組織が假定せられてゐる。此場合について云へば、ボルトキウィツチの認めたるが如く、貨幣の所有者は皆之を提供し、財の所有者は皆之を賣ることが假定せられてゐる。而して此一交換期だけが問題として取扱はれてゐる。貨幣は流通を離れてない、流通するのは次の交換（廣くみれば生産をも含めて考察すべきであるが）期に於て受領せられ、流通するが故である。貨幣の本質はそれが受領せられたる以上、次の交換期

貨幣の價値に就いて

の爲に保藏せらるゝことを要求する。學士の斷言は貨幣の受領者が今の場合、之を保藏せずして、購買の爲に支拂ふことを意味するのであらうか。果して然りとするならば、買はるゝ財は何であらうか。賣残りの財であらうか。しかし、價格の如何に關せず供給せられたる財は賣残り得ないはずである。轉賣せらるゝ財であらうか、今の假定に於て轉賣は除外せられてゐる。考の中から除かれてゐる。受領せられたる貨幣の保藏こそ、貨幣が次交換期に於ける流通を意味する限り、當然の事柄であると思ふ（たとへばピリモウイツチもさう述べてゐるやうに）。これ以外に如何なる考方が可能であると見らるゝのであらうか。

柴田學士は轉じて次の如くに結論せられてゐる。『これまでの一般均衡論に於ては貨幣は『斯かる價格の決定に應じて、何等の摩擦無しに流通するものと假定されてゐる。即ち、貨幣の流通手段としての機能は、言はゞ、消極的に示されてゐるに過ぎない。然し、斯かる摩擦のある場合に、その摩擦は如何に作用するか。抑

もそうした事情は如何にして一般均衡體系にとり入れられるか、換言すれば、如何にしたならば一般均衡體系の中に、貨幣の流通手段としての作用を積極的に織込む事が出来るか、と言ふ事は、勿論、一の興味ある問題である。『此消極的と積極的と云ふ對立の意味が明でない。それはとにかく、學士は貨幣が摩擦無しに流通すると云ふ假定を斥けて、その摩擦のある場合の一般均衡體系を求むべしとせらるゝやうである。けれども、一般均衡の理論がすべて摩擦のないと云ふ條件の下に於ける均衡を目ざしてゐることは、云ふまでもないことである。學士が摩擦ある場合を取扱はるるならば、其研究はさう云ふ研究として可能であらうが、摩擦なしと云ふ假定に於ける均衡の理論を斥ける根據とはなるまいと思ふ。否、後者こそは前者の基礎をなすべきものと思はれる。而して、貨幣價值の問題の根本的解決は摩擦をとり入れては爲しとげ得られざるものであると考へる。

敘述の順序から柴田學士の序論に於ける主張を最後

に述べよう。此部分に於ては、ボルトキイウィツチの貨幣の價值の説明に關する私見が取扱はれてゐる。勿論、私はボルトキイウィツチの見解に重きを置くのではない、その貨幣の主觀的價值の受動性の説明は結局に於て、バレットの均衡方程式組織のデイヴィジアの變形として私の述べたるものまでに改めらるゝことを必要とすると思ふから。たゞ此點について柴田學士は、一般均衡の方程式組織の中に交換方程式をとり入るゝことの出来ないことを主張してゐられる。その論據はかつてフィシャア説の吟味に述べられたるものである。⁹⁾ 學士によれば『所得説又は購買餘力説等は、此の意味に於て、一般均衡體系と完全に一致し得る。然し其の事は正に、上述の意味、即ち、一般均衡體系に於て決定される所を』『記述すると云ふ意味に於てゝあつて、一般的均衡論以上に何等かの理論を附加すると云ふ意味に於てゝはあり得ない。即ち、それが妥當するのは、決定されたる賣買總額を購買餘力と看做すと云ふ意味に於てゝあつて、購買餘力が賣買總額、從つ

て物價を一方的に決定すると言ふ意味に於てではあり得ない。¹⁰⁾而して學士の此結論は、フィシャアの均衡方程式組織の批評から來てゐる。フィシャアは一の不足する方程式を交換方程式を以て補ふべしといつたが、補ふのに役立つたのは $p_a \parallel 1$ と云ふ式である、これは交換方程式ではない。一般均衡の體系の中に、交換方程式の入りこむ餘地はない、それは成立したる均衡の記述にすぎぬ。かう云ふのが學士の理路である。なるほど、フィシャアが補充の爲にもち出したのは $p_a \parallel 1$ であつて、交換方程式ではない。けれどもそれから直に、一般均衡の方程式組織の中に、交換方程式が入りこまぬと斷定しうるであらうか。そこに論理の飛躍があると思はれる。少くもフィシャアの均衡方程式組織は自體の價値を伴はぬ所の、單なる要求權としての貨幣を取扱つてゐない、それは自體の價値をもつ貨幣だけを取入れてゐる。それに於て、交換方程式なくして均衡の成立が説明し得らるゝとしても、同一のことが單なる要求權としての貨幣をとり入れたる均衡方程式

貨幣の價値に就いて

組織にあてはまると云ふ必然性はないはずである。一體貨幣は一方、價格單位であると共に、他方一般的交換手段である。而も $p_a \parallel 1$ の式によつて示さるゝ貨幣の機能は前者だけである。否、この機能のみを營むものは貨幣ではない。従つて交換手段としての機能を均衡方程式組織の中にとりこまざる以上は、貨幣の作用が十分に顧慮せられてゐるとは云へぬと思ふ。而して交換手段としての機能は、交換方程式の形に於て總括的表現をうる。従つて、交換方程式が均衡方程式組織の中に入りこむことなしと云ふ主張は、單にフィシャア説の批評から結論せらるべきものではなからうと思ふ。若し交換方程式(又は之に代る表現)を取り入れぬとするならば、所得増減から來る物價の變動は、均衡方程式によつて、如何にして説明せらるべきであらうか。私は必ずやそこに打ち克ち難き困難があると思ふものである。説いて盡さざる所多いけれども、紙數に制限があるので、こゝに筆を擱く。前述の諸點について、重ねて柴田學士の批評をきく事を得ば、深く幸とする所である。(一九三二、七、二七夜十一時)

第三十五卷 七二三 第五號 一二七